特別報告

ドイツ語圏における死生観研究に関する予備調査

浅見　洋[1]

1．用 務 地

ドイツ連邦共和国及びスイス連邦

2．日程

平成 20 年 9 月 14 日～30 日（17 日間）（**表 1**）

表 1：旅行日程

月　日	旅　行　日　程
9 月 14 日（日）	移動日　金沢→名古屋
9 月 15 日（月）	移動日　名古屋→Frankfurt→Monbachtal
9 月 16 日（火）	Freiburg im Breisgau（Totentanz 現地調査） Freiburger Münster，Güntarstal，Arter Friedhof
9 月 17 日（水）	München（Michael Ende u. Totentanz 資料調査） Michael Ende Museum im Schloß Blutenburg
9 月 18 日（木）	München（München Tomono-Kai 聞き取り調査）
9 月 19 日（金）	Garmisch=Partenkirchen（Toten Tanz 現地調査と資料調査） ・Kath. Pfarrkirche St. Martin/ Garmisch ・Michael Ende Ausstellung（Kurhaus）
9 月 20 日（土）	Basel（Toten Tanz 資料調査）　Kunstmuseum Basel
9 月 21 日（日）	移動日 Basel→Kassel Wilhelmshohe
9 月 22 日（月）	Kassel（Totentanz 現地調査） ・Hessisches Landesmuseum　・Museum für Sepulkralkultur
9 月 23 日（火）	移動日　Kassel→Monbachtal
9 月 24 日（水）	Bad Liebenzell（Seelsorge に関する文献調査） ・Liebenzeller Mission ・Das Theologische Seminar der Liebenzeller Mission
9 月 25 日（木）	Uni. Heiderberg（Diakoniewissenschaft の文献調査） ・Praktischen Seminar　・Diakoniewissenschaftliches Institut
9 月 26 日（金）	Heiderberg Uni. (Seelsorge に関する文献調査) Fakultätsbibliothek von der Praktischen Theologie
9 月 27 日（土）	Ludwigsburg（文学資料調査） Deutsches Literatur Archive Marbach
9 月 28 日（日）	移動　Ludwigsburg→Frankfurt
9 月 29 日（月） 9 月 30 日（火）	移動　Frankfurt→名古屋→金沢

[1] 石川県立看護大学

３．出張目的

今回の研究出張は死生観とケアの研究，特に日独における死生観とケアの比較文化的な研究の予備調査である．調査・視察の具体的対象は①死の舞踏（Totentanz），②ドイツにおける日本人高齢者たちの活動，③デイアコニッセ（Diakonisse）の活動の３つであり，出張旅費は科学研究費補助金「現代日本における高齢者の死生観とケア・ニーズに関する研究」基盤研究（B），課題番号16320012 から支出した．

４．研究旅行の内容

４．１　死の舞踏

「死の舞踏」と称される一連の絵画，壁画，版画，文学には，擬人化された「死」（骸骨）が様々な身分，職業，年齢，性別に属する人々を死に導く光景が描かれている．これらの芸術の共通テーマは死の普遍性，平等性であり，死は生前の身分，貧富、功績，生きざま，老若男女などと無関係に，誰にでも不可避に訪れるという死生観が形像化されている．こうした「死の舞踏」が文化現象として中世末期のヨーロッパを席巻した背景として，1347 年から 1350 年にかけてヨーロッパ全土に流行し，3 割以上の人々が罹患して命を落としたペスト（黒死病）の衝撃をあげる説が多い[1]．有効な治療方法がなく，皮膚が黒く変色し，多くの人が手の施しようもなく亡くなっていく光景を目の当たりにして，人々は人生の虚しさ（vanitas）を思い知らされたに相違ない．そうした死に翻弄される人々の有様を描いた「死の舞踏」は，死の普遍性，平等性の自覚と同時に，「memento mori（死を忘れるな）」という人生観をヨーロッパに流布させた．

今回の出張では，まず南ドイツのフライブルク（Freiburg），ガルミッシュ=パルテンキルヒェン（Garmisch=Partenkirchen），北ドイツのカッセル（Kassel）とスイスのバーゼル（Basel）に残存する「死の舞踏」の壁画と版画を調査した．特に前２つの地で調査した「死の舞踏」は比較的新しい（18 世紀後半）壁画であるが，日本にはこれまで紹介されたことがないものである．

フライブルク市旧墓地（Alter Friedhof von Freiburg）の墓地礼拝堂（Friedhofskapelle）（**図 1**）の「死の舞踏」は，墓地の正面入り口にある礼拝堂前面のホールの左右の壁に描かれた 13 枚の壁画である．学者，農民，司教，貴族，乞食，主婦，王妃，乙女，子供などが骸骨によって死に誘われる光景が描かれており，それぞれにドイツ語の言葉が添えられている．（**図 2**）ドイツ語での説明書きはこの壁画が比較的新しいことを示している．また，礼拝堂に入る扉の両側と上部には昇天図が配置されている．1757 年に礼拝堂創建時に描かれたものが，1944 年に第二次世界大戦によって破壊され，現存のものは 1963 年に修復されたものである．

図１：フライクブルク旧墓地の礼拝堂

図 2：フライクブルク旧墓地礼拝堂ホールのトーテンタンツの一部、（子どもを死に導く骸骨が描かれている）

ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンの聖マタイ教会（Katholische Pfarrkirche St. Martin/Garmisch）に現存する壁画（**図 3**）も，18 世紀後半の作である．教会堂左側の入り口の左壁全体に描かれており，聖職者や民衆の一団の中央には黒いマントを羽織った骸骨が，右側の壁には昇天図が描かれている．

図 3：聖マルティン教会（ガルミッシュ）の「死の舞踏」

中世末期における「死の舞踏」現象の発祥の地がパリのフランシスコ会修道院聖イノサンの墓地であると考えられているように，中世の「死の舞踏」の壁画はほとんど墓地もしくは教会に描かれたものである[2]．上述の 2 つの壁画はともに 18 世紀後半のものではあるが，中世において一般化された「死の舞踏」のテーマ，モチーフ，様式などを継承していると考えられる．前者は連作であり，後者は独立した一枚の壁画である．人々とともに描かれた骸骨（死）は埋葬に参列する人々や教会に集う人々に，現世の生命の傍らに絶えず死があることを覚えること，昇天図は永遠の生命を得て天国の門に入るような生き方をすることを語りかけていると思われる．

バーゼルの市立美術館は H・ホルバイン（Hans Holbein der Jüngere，1497/9-1543）の手になる「死の舞踏」の木版画を所蔵している．ホルバインがフランスのリヨンで出版した『巧妙に構想され，優雅に描かれた「死」の像と物語（Les simulachres & historiees faces de la mort，1538）』は 2 冊の挿絵本の合冊である．1 冊目は 41 点の木版画を載せた通称『死の舞踏（danse macabre）』で，各ページはホルバインの原画をバーゼル在住の H・リュッツェルブルガー（Hans Lutzelburger）が版刻した挿絵と，ウルガータ聖書（editio Vulgata）からの引用句，そしてその引用を説明するフランス語の 4 行詩から構成されている．中世の聖俗の階層制にしたがって，死者（le mort）があらゆる階層，職業の人間をひとりずつ連れ去ってゆく場面が，行列のように描かれており，添付された聖句と詩句は死の絶対性と現世の無常を指摘し，日常生活の悔悛を促す教訓的，道徳的内容をもっている．「死の舞踏」をテーマとする木版本はそれ以前にもあったが，本書が当時の人々の間に人気を博し，広く受け入れられため，それ以降ヨーロッパ全域に流布した．[3]

現代文芸においても「死の舞踏」のテーマとイメージは変容されながら引き継がれている．そうした作品の一つとして日本で最もよく知られているのはおそらく童話作家 M・ エンデ（Michael Ende）の『ハーメルンの死の舞踏（Das Hamelner Totentanz，1993）』であろう．この作品理解のためにミュンヘン（München）のブルーテンブルク城（Schoß Blutenburg）にあるミヒャエル・エンデ博物館（Michael Ende Museum）（**図 4**）とエンデの生まれ故郷であるガルミッシュのミヒャエル・エンデ展示館（Michael Ende Anstellung）を訪ねた．ミュンヘン郊外のブルーテンブルク城の国際児童文学館は日本の童話をはじめ世界各国の童話を所蔵している。エンデ博物館はその一角にあり、日本文化に傾倒したエンデを偲ばせるような展示品が数多く見られた。エンデの生誕地であるガルミッシュにあるエンデ展示館はクアハウス（Kurhaus）を改造したもので，2008 年春にオープンしたばかりであった。

図 4：ミヒャエル・エンデ博物館のあるブルーテンブルク城（ミュンヘン）

『ハーメルンの死の舞踏』は『ハーメルンの笛吹き男』として流布してきた伝説に，エンデが現代風の新解釈を加えて創作したファンタジーである．ハーメルンの笛吹き男はネズミ捕りであり，笛の音とともに子どもたちを連れ去った人物である．エンデの『死の舞踏』における死に導くものとは「お金」（Gold）であり，お金によって支配された富裕な支配者層、上流階級が市民を死に追いやった張本人である[4]．こうした「死の舞踏」の新しい解釈を含んだ文学や絵画は現代でもさまざまに描かれており，そこにドイツ語圏における死生観の変容の一端を見ることができた．（**図 5**）

図 5：ミヒャエル・エンデ博物館のトーテンタンツに関する展示

1972 年にネッカー河畔のマールバッハ（Marbach）に作られた文学史料館（Deutsches literatur archive Marbach）には，1750 年から現在までの近代のドイツの重要な作家と学者の手書き原稿約 1,100 点が展示されている．見学することはできなかったが，地下書庫には近・現代ドイツ文学の約 70 万冊の蔵書が保存されているとのことであった．「死の舞踏」や死生観研究と関連する現代作家の手書き原稿としては T・マン（Thomas Mann,1875-1955）と F・カフカ（Franz Kafka,1883-1924）の作品が目にとまった．特にマン『魔の山（Der Zauberberg,1924）』の 5 章には「死の舞踏（Totentanz）」と題された節があり，スイスのダボスにある高原サナトリウム「ベルクホフ（Berghof）」で二人の従兄弟と踊りながら死に導かれていく少女カールシュテットが描かれている．この書で死へと誘うものとは結核である．そのように，「死の舞踏」のメタファーは中世を超えて現代にも生き続けているのである．

４．２　ドイツにおける日本人高齢者たちの活動

2000 年 4 月に導入されたわが国の介護保険制度は概ねドイツの介護保険制度をモデルとしており，ドイツにおける高齢者医療や介護のシステムは国際的にも評価の高いものである．しかし，在独の日本人たちにとってドイツの医療保険や介護保険だけではカバーできない健康上，生活上の問題が多々ある．特に高齢者施設や療養の場では「日本食が食べられない」，「日本語が話せない」というような文化的問題は，異文化内で老後を暮らさざるを得ない在独日本人たちにとって非常にストレスフルな現実問題である．「ミュンヘン友の会―日本人の老後を支えるネットワーク（München Tomono-Kai―Nachbarschaftshilfes für Japaner（innen）in München und Umgebung e.V.）は，そうした文化的諸問題を抱えたミュンヘン在住の日本人のたちが相互扶助の目的で2001年10月発足させた非営利団体（NPO）である．（図 6）

図 6：ミュンヘン友の会パンフレットとロゴマーク

支援の基本は「日本食の提供や日本語を必要とするサービス」であり，具体的には①家事・その他：食事作り，買い物，話し相手，散歩の介助，代筆・朗読，日本の家族への連絡，行事への参加付き添い（コンサートや催し物など），子育てに関する相談，②医療機関関係：通院の付き添い，手続き，連絡，③役所関係：役所への同行，書類の記入，提出などのサービスを提供している．年会費は 30Euro で毎年 1 月の例会で前納する．サービスは基本的にはボランティアであるが，時間の提供に対する謝礼として，サービスの種類に関係なく 1 時間 8Euro，その他に交通費，ガソリン代，食事の材料費などの実費をサービスを受けた人が負担するシステムになっている．サービスは原則として，1 回 2 時間，1 週間 2 回である．

ミュンヘン友の会の影響を受けて，フランクフルトとその周辺在住者によって「ライン・マイン友の会（Rhein Main Tomonokai）」、ハイデルベルクとその周辺在住者によって「ライン・ネッカー友の会（Rhein Necker Tomonokai）」が創設され，日本人の老後を支えるネットワークはドイツ各地に広がりつつある．9 月 26 日に，昼食のために入ったハイデルベルク旧市街の日本食レストランで「ライン・ネッカー友の会（Rhein Necker Tomonokai）」の会合に遭遇し，話を聴くことができた．この集まりはドイツ公益法人登記のための準備会合で，10 月上旬には無事登記が認められたことを帰国後に知った．

こうしたドイツ各地の「友の会」の設立と活動を通して，高齢者のケア・ニーズとして「文化ケア」の必要性が示唆されているように思う．日本国内の高齢者ケアの現場ではほとんど意識されないが，異文化で暮らす高齢者の方々のケアは，単に医療福祉上の技術やシステムと関わる問題のみではなく，文化的な問題を伴うということを実感することができた．日本国内においても生活者は多種多様な文化的社会的な背景を持っているのであり，かつ外国人滞在者も増加している。そのため，今後こうした文化的な側面を考慮した援助は今まで以上に必要になると考えられる．ドイツにおける「友の会」活動の視察は人間が文化と社会の中で生き、死んでいく文化的社会的存在であることを再認識する契機となった．

ミュンヘン友の会ＨＰには「2002 年 4 月に e. V.（登録協会）として正式に認可され，ドイツの社会福祉組織（カリタス）の傘下に入りました」[5]と記されているように，「友の会」は NPO（非営利団体）として認可されたドイツ公益法人である．e. V.（eingetrage Verein の略）は公益法人として登記されていることを意味し[6]．こうした登録協会はディアコニー（Diakonisches Werk der EKD; DW），カリタス（Deutscher Caritasverband; DCW），ユダヤ中央福祉会（Zetralwohlfahrtsstelle der Juden in Deutschland; ZJD），赤十字（Deutsches Rotes Kreuz; DRK），パリテート福祉団体（Paritätischer Wohlfahrt; DPWV），労働者福祉団体（Arbeiter Wohlfahrt Organisation; AWO）の 6 つの公益福祉団体に属している．[7]日本の社会福祉・社会保障は社会福祉法人や医療法人が主な担い手であるが，ドイツでは教会組織や労働組合などさまざまな市民組織によって運営される公益福祉団体と登録協会が大きな役割を担っている．ミュンヘン友の会はカトリック倫理を基盤としたカリタス（Caritas，慈善），ライン・ネッカー友の会はプロテスタントの実践神学を基盤としたディアコニー（Diakonie，奉仕）の傘下で活動していた．

４．３　デイアコニッセの活動について

「友の会」がキリスト教系の公益福祉団体と関わっているように，ドイツにおける医療福祉活動にとってキリスト教は理論的にも実践的にも大きな役割を担っている．大学の神学部や神学校は聖職者，牧会者と同時に「魂をケアする人（Seelsoroger,Seelsorogerin）」を養成する教育機関であり，医療，社会福祉，介護，教育といったケアの臨床現場に多くの奉仕者を輩出している．例えば，多くの病院には「魂のケア」部といった部局（名称が異なる場合もある）が置かれており，神学を学び，「魂のケア（Seelsorge）」の研修と臨床実習を行ってきたカトリックの神父やプロテスタントの牧師が患者・家族と医療スタッフの「魂のケア」のために奉仕している．また，カトリックのシュベスター（修道女，Schwester）やプロテスタントのディアコニッセ（女性奉仕者，Diakonisse），ディアコーン（男性奉仕者，Diakon）と呼ばれる人々が医療福祉職の資格を持ちながら社会奉仕をしている．彼らの給与や生活費は基本的に教会税（Kirchen Steuer）から支給されている[8]．

今回の出張では，プロテスタントにおけるディアコニー運動の精神とその活動を知るために，ハイデルベルク大学神学部のディアコニー学研究所（Diakoniewissenschaftliches Institut）とリーベンゼラー神学校（Das Theologische Seminar der Liebenzeller Mission）を訪れた．ハイデルベルク大学のディアコニー学研究所は 1954 年に設立されたディアコニーに関する総合的な研究所である．ドイツ語のディアコニー（Diakonie）は「仕えること」を意味するギリシア語のディアコニア（διακονια）に由来し，「奉仕者」を意味するディアコノス（διακονοσ）と同系である．聖書の「使徒言行録」6 章に由来するディアコノス（日本の教会では通常「執事」と訳している）の仕事は，古代教会では聖餐や食事の世話をしたり，貧しい人々や病人に奉仕することであったが，現代のディアコニー運動ではそうした隣人愛の精神が社会奉仕，慈善活動，福祉事業活動として継承されている．[9]

例えば，1833 年にカイザースヴェルト（Kaiseswelt）で，T・フリートナー（Teodor Frietner, 1800-1864）がはじめたディアコニー運動は，最初は福祉や貧しい人々の救済運動であった．それが 1836 年に医療福祉施設「母の家（Mutter Haus）」をつくるとともに，女性の社会進出に重点を移し，女性奉仕者であるディアコニッセの養成に力を注ぐようになった．「母の家」で定められた見習い期間を修了するとディアコニッセとなり，奉仕活動の一つとして看護活動に従事した．このディアコニッセ養成がヨーロッパの看護師養成の一つの原型である．近代看護の創始者 F・ナイチンゲール（Florence Nightingale，1820-1910）

もクリミア戦争で傷病者を看護する 3 年前に，カイザースヴェルトの「母の家」に 2 度滞在し，そこでキリスト教的な奉仕の精神と方法を学んだ．

ハイデルベルク大学神学部の実践神学ゼミナール（Praktische Theologie Seminar）の図書館やリーベンゼラー神学校の図書館では「魂のケア」に関わる雑誌を調査した．20 数年前に訪れたときに比して，牧会学，ディアコニー学の書籍に加えて，生命倫理，医療倫理，臨床心理，社会福祉，カウンセリング論，障害児教育，死生学などの書籍，学術雑誌が増加していた．（図 7）

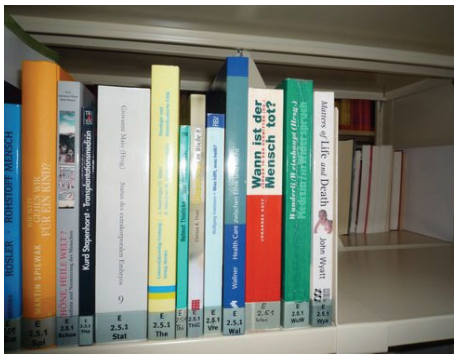

図 7：リーベンゼラー神学校のゼールゾルゲに関する図書

ハイデルベルクでは神学部の博士候補生（Doktorand）である吉田新氏の案内で，福祉施設，カウンセリング施設，リサイクル・エコショップなどを視察した．こうした施設のほとんどが福祉団体ディアコニー傘下の NPO であった．例えば，高齢者や貧困層向けのリサイクル・エコショップmanna（マナ）では，ディアコニッセとともに何人かの良心的兵役たちが奉仕活動を行っていた．（図 8）

図 8：ハイデルベルのリサイクル・エコショップ（高齢者，貧困層向け）MANNA の内部

リーベンゼラー宣教団（Liebenzeller Mission）は中国への宣教に始まり，今ではアジアやアフリカの発展途上国で宣教活動と医療福祉活動を行っている．宣教団本部やその宿泊施設モンバッハタール（Freizeit- und Bibelheim Monbachtal）では，沢山の引退宣教師であるディアコニッセたちと面談することができた．彼女らの多くはシュバルツバルト一帯の小さな集落に住む人々やモンバッハタールを訪れる老人たちの世話をしていた．その内のシスター・グレーテル・ルオッフ（St. Gretl Ruoff）は日本での長い宣教師活動を終え，今は老人たちと世界各国の若者たちへの聖書講義や相談活動を担当しておられた．（図 9）こうしたディアコニッセたちの活動には，キリスト教的死生観とケアのあるべき関係が現れているように思う．

図 9：リーベンゼラーミッションのディアコニッセ（女性奉仕者）

引用・参考文献

1) 水之江有一：死の舞踏　ヨーロッパ民衆文化の華．丸善，4-6，1995.

2) 藤代幸一：「死の舞踏」への旅．八坂書房，17，2002.

3) 海津忠雄編：ホルバイン―死の舞踏．岩崎美術社，1991 参照.

4) ミヒャエル・エンデ著，佐藤真理子、子安美知子訳；ハーメルンの死の舞踏．朝日新聞，1993 参照.

5) ミュンヘン友の会 HP（http://www.rakuraku.de/tomonokai_main.html），2009．1．18．参照

6) 室田昌子：ドイツのまちづくり分野の NPO 法人の活動実態．武蔵工業大学環境情報学部紀要，(8)，196-204，2006.

7) 株式会社日本総合研究所：社会奉仕活動の指導・実施方法に関する調査研究　要約版，2001，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/011002/001/german.htm，2009．1．19.

8) 浜渦辰二：魂のケアについて―仏独・ホスピスとスピリチュアル・ケア研修報告．静岡大学人文学部人文論集，56（2），1-23，2005.

9) 熊沢義宣：キリスト教死生学論集．教文館，199-236，2005.

（受付：2009 年 1 月 9 日）

Preliminary Research on Views about Life and Death in German-speaking Country.

Hiroshi ASAMI